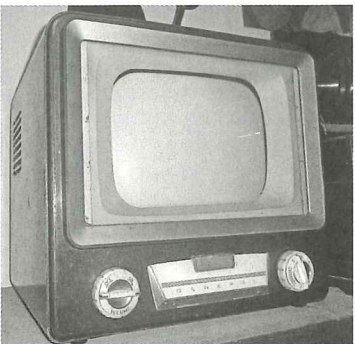


郷土館発

テレビ

郷土館の展示棚の上に昭和三十四年ごろ製造のテレビ受像機があります。もちろん白黒で、チャンネルは六局、手でガチャガチャと回すものです。



昭和34年ごろのテレビ

玄関にあるポータブルテレビはカラーで、チャンネルは十二局プラスUHF、つまみを回す形式です。郷土館で使用しているテレビは、リモコンで操作しますが、BSは入りません。こまではブラウン管式です。



昭和五十四年製ポータブルテレビ

液晶やプラズマが普通になってきたと思ったら、近頃は4K

テレビなどというものまで発売されています。

宮本常一氏が名倉で座談会をもった昭和三十二年と三十六年に、テレビについて調査を行っています。

氏が聞き取りをした電気店によると、名倉全体で三十年から三十二年にかけて三十六台のテレビが購入されています。ところが、三十六年になると、約五百軒の民家に四百台のテレビがあったといえます。

宮本氏は、テレビの可能性として、僻地性の解消を挙げています。どんな山間地や離島でも電波が届きさえすれば、都会と同じ情報が得られるということに、期待をしていたようです。

と同時に、不安も抱いていました。花祭を見に北設楽を訪れた時、土地の子どもたちが数人しか会場に現われず、不審に思っていたら、真夜中になって急に見物人の数が増したので、尋ねてみると、テレビを見ていたとのこと。人々の生活時間が、テレビに支配されるようになってきていると感じたそうです。五十年以上前のことです。

今後も発達するテレビ、くらしの中にどう生きていくのでしょうか。

(奥三河郷土館

館長 平松 博久)